

〈金融史パネル〉

制度化と同質化の金融史

麗澤大学 佐藤 政則

〔パネルの主旨〕

本パネルでは、日本の金融史を「制度化」と「同質化」という視点から再検討する目的のもとに、その糸口を提示すべく最新の研究成果を報告する。

明治以降およそ 140 年間を銀行数の推移で観ると、当初の 30 年間は金融機能に基づく業態分業をキー概念とする制度設計（「制度化」）の時代であり、銀行急増の時代であった。その後 1940 年代頃までの 50 年間は急減の時代となる。ここでは制度の再設計（「制度化」）と共に業態間と業態内の「同質化」が自律的・他律的に始まる。そして戦後高度成長期を含む 40 年間の安定の時代もまた「同質化」が進行し、1990 年代以降減少の時代に入った。銀行数が安定的に推移した 1950 年代から 80 年代の 40 年間は、期間的にはマイナーであり、むしろ異常な時代と言えるだろう。もっともこの安定した時代が、戦前における急減時代の産物であったことも銘記されねばならない。

銀行急増時代のピークは 1901（明治 34）年となる。同年末には 2,359 の本店銀行が存在した。その過半は 441 の貯蓄銀行と 1,867 の普通銀行である。これらの銀行には、大銀行から怪しげなものまで、極めて多種多様な銀行が含まれていた。したがって、これらを一律にフラットな銀行として見做すことには無理がある。本パネルでは、まず銀行急増時代における普通銀行の制度化という問題を考える。一般的には制度先行と思われがちであるが、近年の研究では、両替商や講といったある程度の金融実態を伴った銀行設立（実態先行）のケースが注目されている。次に同質化の問題を考える。具体的には、銀行急減時代初期における貯蓄銀行と普通銀行との業態間の同質化を取り上げ、一つの事例ではあるが、実態分析を行った成果を提示する。最後に、日本の歴史的な問題を相対化するために、インフォーマル金融が重要な役割を果たしている中国金融を取り上げ、そこでの制度化の意味を吟味する。